

大政官文庫

和	一	一
書	一	四
門	九	七
	二	一
	五	六

佛 函 架 冊

内閣文庫

和	一	一
書	一	四
門	九	七
	二	一
	五	六

佛 函 架 冊

内閣文庫	
番號	和 11497
冊數	65 (41)
函號	211 302

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

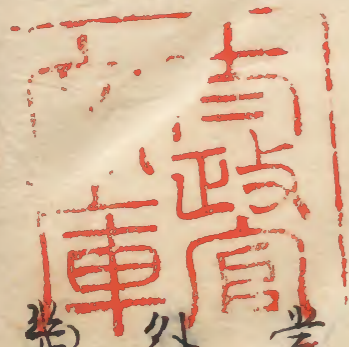
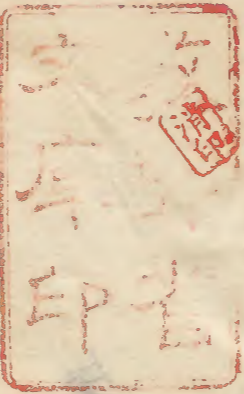
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale

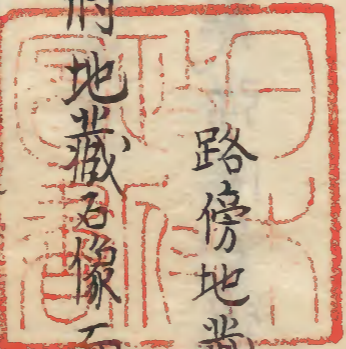
C Y M

Kodak, 2007 TM Kodak





路傍地藏辨



四十一

內一二七九〇號

世將地藏之像而置街衢之側者往往有之無知其始也蓋是以言六道能化而無智者所為也凡雨犯之鳥獸汚之埋馬蹄之埃沒蒿萊之露矣矣夫是輕蔑不敬其過莫甚乎此焉非唯愚俗為之細徒亦薰之不自知其非人不能解他惑也痛乎哉以外世及洸季仙法衰耗如斯等事其賴願多庶幾後生之君子識明迷徒改正過非乃是無窮之

恩庇也或云和光同塵結緣利物卽大士之懷耳今
在路傍結緣往來者亦是利化之一端也何強責之
曰其然不致之至豈其然乎思之思之

對他仙稱弥陀辨

或曰世有無智者向他仙像而唱弥陀名號誠可
笑猶如呼王則言張也可不乖乎曰夫諸仙平等
大悲乃無彼此之異只是視物修善此為喜也
今其弥陀名號乃是多善根而無上功德也聞衆

生稱之而諸仙豈不歡喜乎呼王言張而
相乖者凡夫之事也諸仙大士何其然哉
又云對神祇仙號者如何曰斯事似大乖
矣然都者聰明王直惟念今大誦經稱仙
皆是善事耳何強嫌之乎且仙神俱是
大聖心一揆無有彼此其之清淨一味也加
水之與水矣見其異者唯是凡夫妄情
而已然如予今言則世所不許幾埃明

眼君子

音樂仙事舊例

陋巷投危用戶居閑偶有排闥而到者乃予之舊
識也塞過既事問吾子曾著音樂仙事說有以
有義誠是可言然不知古有作此事者吾固知之
昔弘智法師以恩邦行事音聲一飲初用務通識非
斯莫曉故凡有福會必以簫鼓為先致令其徒如
雲真俗不契於緣情矣想夫從使雖無先蹤在旬

有其利者何必慮之况乃有前車之輒不可不
為矣若其為利化一則雖曰愚夫愚婦之所為敢所不
辭也又何嫌乎夫大士之曠慈卽是逆順無方救活應
宜猶以欲釣而辜人也今其以鼓吹而作仙事乃生
他倍恍入情可謂法令之莊飾愚化之一端也十誦
律曰雖非仙制諸方為清淨者不得不行也亦此
例矣子何議之客謝而退

右弘智傳出唐高僧傳三十一

聖像信不辨

有客問曰也有地藏觀音藥師等諸像而安置堂宇
往往見多其中或有靈驗之著或有無驗者於其无
驗者住詣無跡終日爾於靈驗者緇白駢頭往來
絡繹嗟夫諸仏大士平等一揆何有如此斯之異乎曰
其有水則月現矣無水則不現矣隱現在水而不有
月焉者有信乃有應也無信乃無應也應驗五信何
其責重哉且隨信水之淺深而致令應驗有石薄也

今其愚人問往來絡繹則驚愕而生信最深故感其
應也頗夥矣見往詣無跡乃生信亦淺故其應亦希
也若其厚矣信深歸之則何像無感應乎苟能致敬
乃鮑神獨有靈威況是於仏菩薩之聖像乎於其托
驗散勿生淺蔑之想此乃輕聖之大過也可不懼歟
素夫法身刹見編應無方莫感不應莫處不現豈
有彼此之異乎其之信不即至情而已雖理如此今其世
人依偏仰之信乃能得靈驗也問乎於其仏像如遇

生身至心偈仰焉實是誘世之一端又何可議哉
惣於何仙像存乎生信深致敬即是當來成果緣
因也其之功德豈淺乎乎遂猶為仙禮何況順者乎
嗟呼吾強能之利物也不擇賢愚貴賤亦不隔善惡
邪正只能有信心念仙者則以大悲之心光而無捨不捨
觀音勢至毛主席為其勝友加之二十五聖應逐影護
大方諸仙證誠護念是以不令惡鬼惡神得其使
復無橫病橫死橫有厄難而能得延年轉壽也哉

乃超世之強他無上之大利不可得測者也豈翹易
往之徑路而已乎抑又為現生護念之全場也不可
不信矣予其晶旃

善導大師口出化仙辨

或問世有善導大師像多圖口中出化仙之狀
我聞大師念仙之時從口而出光明未知有出仙
之事否曰如予之言考善導諸傳不見有斯事

但來僧傳中少康法師高聲唱阿彌陀仏仏從口
而出連誦十造十佛若連珠狀亦曰唱仏仏形從口
而出善道同此作佛事ヲ依此則知善道大師亦曾
有出仏之事也決不可疑矣蓋是諸傳之闕也予
猶如陸傳中劉永明中十萬林仏上品上生之事也此例頗
多矣今按慈雲西方異傳云初為觀念佛仏云々從口出
云亦見有律師善法云々像梵有仏從口之語

木食

或來問世有絶鹽穀而食菜蔬蒸烝等以為修行
者謂之木食上人思夫愚婦奔走信仰為真仏想
不知有說否予曰舊來性々有斯之人當有經典
之所據也我智淺識少未見其說故不敢臆議也
夫仏法之食者不釋穀蔬只不過一中食而已此乃三
世仏多也通式万代不削之規則也若其隱深山幽
谷面修道人遠隔鄉閭故無穀可以食唯採木實
草菜以助身人ヲ也以食菓實ヲ而非為道也雲接

老人辨之禪云之掉出自般若三昧蓋積進之極必坐
則者昏非以多為一通也今亦相似矣抑世及一境李弘
法甚弊人情好偽昏或發淫至行逆佛事只見
奇異之事乃駭聞雜當宜翅木食于哉因羅身於
屠而計詐謀現異飾奇驚眩俗目詐惑愚夫將
却會之業為活計之術逐眼前之利忘身後之苦嗟
幸偶得人身殊遇佛法此時不修道何日得能脫也
凡人之處世也從保子載之壽致了人主之壽是

一處之歡樂也耳生死事大無常迅速居所之羊個水
之莫何不思之也痛哉悲矣

接弘法大師遺告有木食之款是此邪義

六十六部

世有巡遊秋葉六十六部而每部納經於神社佛閣
以為修行者謂之六十六部又曰廻國行者也踏步
山川不詳此部歷年月不詳苦力東往西還
絡繹不止近歲最甚不知其之權與不同

其之所出之邪矢空曾無其事二圖經由物心無
所見只世傳昔者源賴朝平時政者世為納經依
此善業而生貴顯之身蓋因之為之名也嗚呼殺為
轉輪王唯是有為之兵報未免輪迴非可冀者况粟
放王手又况人臣之若菜勵身心終而亦常則不慮一
步石牙十里之畢此生平直到淨刹得無此中證無生
忍何幸如之乎唯是無智道俗之所為而不知正法
之為世愚之惑矣實可感傷或曰尔乃瘖之乎謂
乃可也

紫式部

世傳昔者紫式部造源氏物語其文詞雅麗行世
古今後代雖有作者莫以加焉且謂式部乃觀世音
之化身者大非也蓋是經云以婦女身而說法或
將馬前婦之事附會而言也平今試以之不知式

郭說何法君又不知有如馬郎婦等入之事者曾無
僧史所載又不見雜傳所出若如光明皇后及舍利
瓦寺者乃怨之不如怨之好也之一女人也美得言大
士之應化者嗚呼痛哉猥廢過忝都而不忍輕蹟
大聖其罪言淺少或有智請詳焉

源氏七論之辨可也

三十三所巡禮

世尊觀音之聖場而詣三十三處謂之巡禮其周

迴之際累數月歷十有餘國亦到油漫那之各汲而共矣
相傳寬和法皇啓其瑞言云世擬並白門示現之數而爲
之者也然曾無經典所出又仰土支那未聞有此事
唯是扶桑訛謬者爲凡無智緇白羽白以勇爲近世殊
多其由或爲現世福事時降災使樂者或爲將來生
王臣貴顯之家而福祐自在者或徒效他之嚮而爲
山靈岨爲遊覽者皆是不具正信不知正道之所
致也實可慰矣若夫篤信大心必心致誠不遠于

千里而為善提者乃是皆得解脫之良緣又其不能無
感心也可謂愚化之一端矣然此兩方業白于方分不及
其若念仙者所階階仙則同之禮則祝之憶念則憶
念之又觀世音大執至為其勝之行住坐卧乃如在三
尊前且夫真心徹到現存親見後生極樂剎證得
無生忍行必歷山水凡滄露宿又乃行旅其之
巡禮也徒仰影像焉此之念仙也親過真身焉
優劣霄壤不可同日而論也雲梅老人曾有遊名

山之辨亦同斯說

閑忘夜話

予投老荒村蠶居古寺恒因紫扉謝跪賓客止
文絕游奕茗助相如之渴炊蔬忘尖高之肌腫未
則曲肱而為枕竟了則支頤而吟哦曼昂遊原
野息直步復園無世事之汚心有閑寂之祇怡唯
終日倚爐而獨坐冥忘之下倘有客乘月來者乃

柳園入室初燈清話答曰凡人之在每世無不愚貪
賤求富貴也故曰富之子貴者星人之所欲也雖我
秋氏不能免之綺羅之服綿繡之衣嗜言酒好車
饌出則駕有輿僕從克前後入則倚玉几羹高室
侍左右高明克座嘉賓揖武室列方丈之饌門止
馳馬之車誠是人世之人王盛也若夫說法度人取徒
肆業講經論解群曲之音詞吐玉思辨如流握深慈
之鹿擊妙德之樞乃是法門之克弟也我首子如

為終日掩扉蕭然無事既無富潤屋未有德作
人如學獨善之行似效巢許之類曾無利是天
下之初氏是悠々遊民而已古云佛法大事請退而
也子何不思之年曰嗟起予者子也居吾為子言之
凡沙門致富者得過世之幸而依所施之多苟
不遇則君子亦不暇矣者懷縱忍與世相背其之所
為也不能悅久而却為人被疎焉只有其踣白眼之
勢曾無凡草以優之懷何以得敬田貴然猶幸蔬食

某善其終縹緲納以足免其凍餒也又何求之有世儔
猶有云死生有命富貴在天况秋氏乎且夫弘法利人
者大士之兼懷而學仙之徒為專可務之急也亦非不
欲之而我學之鹿少拙智淺德輕豈有濟世之功才辨
不及王衛之談淨業不得惠遠之道一旦疾既不能救何
况多疾乎不知待九品及第之時而從事于斯也未晚乎
性素愛田賦世事之喧囂靜藏此竹林之中好嗜酒歌兒
作詩作文也拙詞俚語雖不見取花鳥之景屋宇

月之夕吟咏性情以為閑意之友也此吾之群也諸卿
貢之元凱有厄倚之癖白氏有章句之癖文適王倫
之愛馬柳公愔元衰之嗜酒子猷之作茂叔之蓮亦
乃癖也此皆古今之所貴而子載之美談也嗟乎
我克且病矣只是生涯餘一死已矣從吾之所好而終
斯生焉各笑不答小子左側記之燈下

沙門炬範記

石曼荼羅講寺炬範師業一て吊以亦たれり
其以をわらぬ強りて刻此足に地刻るは
街以に置る而之法師も系師七口乃止に上家色
包し初也始りんに刻國少以先之地墓亦
石碑と云と云と兵懸乃此率多ハこれ以廢
或は鎮石と云一前と地橋柄と以切用一と云り
仏像と彫るる墓亦以之と云也又初之に名係
多一系師町之地石地是乃云と云と古寺
り

墟に亦他一者後園に石像と云と包も云は
ふれと戸外にあり一後自之をいひ傳方
と多一と云り人證一多と不致乃其
り

予一とせに列方を乃法に宿りり一結
黄金石佛と云とわらへし一後
と云一と云あり一則亦刻多一と云
寺は養正院と云人と云はる一の石中

後入のえのふりしとふつたふたはまよしと
又常武部と行らむあしをれあしをれあしを
原武部と行らむあしをれあしをれあしを
ととりしあしをれあしをれあしをれあしを
六十六部の廻國に十三部乃れ礼部一多しをれ
のぬえあしをれあしをれあしをれあしを
しは六部廻國の教をれあしをれあしをれあしを
宿と行らむあしをれあしをれあしをれあしを
別列有取等 乙一一年

甲 午乃美我尾西國衛云 播磨 六十六部此有二人
信元 事ありしは廻國乃れ行りあしをれあしをれあしを
ととりしあしをれあしをれあしをれあしを
西に武部と行らむあしをれあしをれあしを
あしをれあしをれあしをれあしをれあしを
しは六部廻國の教をれあしをれあしをれあしを
ととりしあしをれあしをれあしをれあしを
しは六部廻國の教をれあしをれあしをれあしを
ととりしあしをれあしをれあしをれあしを

成と推約のその部方より

親書乃東流其午院と度太にいと合新とるは

少いと成乃る中とまこと今東師村東西乃中成

文のいさく一海波のあ傍其葉葉のいさく一

中其貴をいさく一とるいさく一古六印守とくも

微いさく一いさく一四記よりいさく一遺御記其いさく一

云文昭十三平十月拾皮其いさく一其いさく一遠畢スル

是百十二年ノ四月の強強其いさく一其いさく一遠撰

いさく一いさく一いさく一
いさく一いさく一
いさく一いさく一

絶書に道其いさく一いさく一

いさく一いさく一いさく一いさく一いさく一いさく一

いさく一いさく一いさく一

いさく一いさく一いさく一いさく一いさく一いさく一

いさく一いさく一いさく一いさく一いさく一いさく一

いさく一いさく一いさく一

いさく一いさく一いさく一いさく一いさく一いさく一

あはれなる心は

他なる心は

石清水の傍に

りしけふた

ふと

或曰る

古記曰く

と

歌あり

二十

何

世

空

あ

二十

あ

六角堂中山の法清水寺は性善の御寺なり
一 神呪寺之御寺及びの公堂寺より此れ侍を
候とて母日本皇の御代ありと記せし
と云ふ事乃し
と云ふ事乃し
と云ふ事乃し

南紀山陽古事乃し因て御代ありと西出記云
一 御代ありと云ふ事乃し
一 御代ありと云ふ事乃し
一 御代ありと云ふ事乃し

御代ありと云ふ事乃し
一 御代ありと云ふ事乃し
一 御代ありと云ふ事乃し
一 御代ありと云ふ事乃し
一 御代ありと云ふ事乃し
一 御代ありと云ふ事乃し

今更御代ありと云ふ事乃し
一 御代ありと云ふ事乃し
一 御代ありと云ふ事乃し
一 御代ありと云ふ事乃し
一 御代ありと云ふ事乃し

清く〜〜〜
〜〜〜
〜〜〜

・往生西方浄土瑞應則傳一冊 四十八人の御書と
記久送田川 後西村と云るの御天徳二年申
曆子乃日延上人と云るの御持世を
傳し

惠遠曰雲雲の御書乃西遠と集し

・人々〜〜〜
跡〜〜〜 天記に〜〜 梅尾照惠ハ物子と跡
参して千歳と梅む〜〜と云せ〜〜
ふんん密教乃中は〜一切の御書は〜
〜〜〜
耶形契印〜〜故也我由神江乃御教亦隨玉
叙教乃兼乃頼多〜篤行の士毎〜
て可也

常教大教非常教見教書

大辟法下と教階と云々常教也八層の云
教より大形常るこ凡教書、大旨名人主之
所及常る人令有議云云

世説に五我年七年魯中呪と道云方中樹の下
以修子小児禁中事と競る王成、曰世樹下の
傍に中呪し宿多のり如く多し必其中ありん
と云々と云々云々して如くと云々云々云々

律書とあり

令終乃隆併信と向し念仏せしむと經又
方中より又侍也 曰觀經命欲終時到教合掌

又字稱南無阿弥弥佛云云又華嚴經之賢首云

臨終勸念仏及示尊像令瞻敬云云

數珠乃多少經説如何曰瑜伽念珠經云念珠
分別有四種上品取及中下下八十乃上為上
百八珠為最勝五十四珠以為中二十七珠

為下リ云其他四十二顆及七二十一顆乃念珠
ハ陀羅尼集經に出十四顆ハ散珠功德足
出処ト云考按正方ニ一百八顆ト三方にて
別ニヤシト云今後ト云石万遍乃散珠ハ
これ其の合理ナリ

○或人曰念珠ハ今俗に云こまうこと細りヤ日孔
行ハ琴子操曰念珠引者乃霍里子高妻麗王
所作也云これと云一昔ハ古くゆりその答
西域より出二十五種ト云ハ次侯ト云

こまハ琉球國の俗子之結子云々也

○柿樹ヲ絶毒 冬陰 元鳥巢 天虫
霜葉可読 毒實見 落葉肥大

酉陽雜俎に出ス

○念珠ト云ハ字換凡言多ク皆言トシメ(さ)り官風
歸文通二年記に詣テ于本念佛并念珠也
極盛也云云

念珠ト云ハ一ノ本此圖卷を在リト云
に有ハ極盛ト云

但一般若然而首標乃詩叙凡世極のころと云
て或曰吾等愛和訓典と云苑言同花之白且
大者如菩薩の「衆白象之鼻也」と句とし
ふんき〜と〜と云ふるの意知れりや
小野山町の修り〜の〜但〜
記云小野山町六十九歳於井平寺に死す云光
廣師百人一首抄同之為記の記井平寺と云山
東國相宗郡井堤里光明寺と云ろ左大

巨橋諸兄建之の寺門

観隨師東より上りて皆遠きせしむる
人多まらんと結縁と一列の事由之十年待年
相何れも亦因縁ありて五月申より八日大谷の
宮に御忌ありし一筆の傳々と巻て之を
二巻に入す

前座主壽經光院二宮大王

関方行啓此の〜恩顧と云〜依奉天女との

日徳輝と野し〜と経夜乃草を如く
老乃眠猶多中〜吹風笠凡空絶て葦頂
曉月雨晴く竜臺月孤了〜竹園夕
乃烟島ぬ鳴呼五回り五月雨〜袂と
〜〜乙今日正當御月諱とい〜ま
せ〜〜〜聖子一百万と〜
乃〜彼行初園満思〜事後生乃奉為
備〜〜〜世乃るま〜乙未五月

口し於〜花搦と〜

〜〜〜年と〜老此段に於れ搦

家生鍋釜乃。雙乃。字と年歡以月〜事秘及

にゆ

文字に置と河思あわ〜其意に〜

旁若兵人 史記荊軻傳 晋書列傳

若侍兵人 九太仲詠 史詩 乃〜三乃と侍は作ら

傍若無人とい俗に事れ狼藉のくまきし本
意の者といふ者ありといふ也

興願全剛地藏菩薩秘記

世書ハ蓮華之味經といて記せり希天台座

主三品法親王位也 龜山院之皇子定尊親王指子
与成徳院青蓮院門跡

九十計ありて年一も

蓮華之味經 大廣智名堂
之藏教

古言宗相兼惠果初為弘法大師に授けし也

一と敏朝の後宮生誕乃 取土惠と兼寺乃直

雅とに汝授けしと 醍醐及仁和寺代秘傳

云云

天台宗お兼の西園寺と前相國共孫竹園院の

御師也為りて之十五万兩の入金と墨別と後也

天台の曹經等といふ事と一清涼山也

竹井寺に隆徳和尙五臺山修業の事といふ

事と受て蓮華之味經といふ事といふ

○今茲春を喜ばずして夜痛く處りて昔は傳
男也りてあつたまゝにあらんかめをたぬれと
好くはしむる世に凡そ度下りて人藝田村の
母の如くしておとをたぬれとて人高師の
部とある

○巴の文の婦中取の如くは婿の如くして

○巴の文の婦中取の如くは婿の如くして

小塔集書跋

俗に徳水 坐象宙庫 一笑遊戯

○字佛母聖舞の如くは婿の如くして

○つはるの如くは婿の如くして

○より危の後割信 二心此に念

併乃は名ふりて天の三乃を

去りけりて名ふりて

安春殿と唱物ありて

費去の年の年終り言上人としく御寺の記は此
のの考ね定とせしとて法牌子以下乃事
令有る一冊の年終りの元日年終り乃事
あつたこととて一冊の事とて一冊の事
しつゝ御寺の事とて一冊の事とて一冊の事
御寺の事とて一冊の事とて一冊の事
御寺の事とて一冊の事とて一冊の事
御寺の事とて一冊の事とて一冊の事

御寺の事とて一冊の事とて一冊の事
御寺の事とて一冊の事とて一冊の事
御寺の事とて一冊の事とて一冊の事
御寺の事とて一冊の事とて一冊の事
御寺の事とて一冊の事とて一冊の事
御寺の事とて一冊の事とて一冊の事
御寺の事とて一冊の事とて一冊の事
御寺の事とて一冊の事とて一冊の事
御寺の事とて一冊の事とて一冊の事
御寺の事とて一冊の事とて一冊の事

あし〜あし〜の織國に還るも〜
解衣の時かよひ〜
のほに有偏沈没のほ等とともひともひにひまの
気まを〜
まよりぬほほほほ ねまらま太直王微妙淨草草の
ほろ〜

ほに懸天玉場御書今の糸衣ほほ 細にちま〜

燈とく川のほにほひて月にひひきあり有感
一糸と極せ〜るほまのひ〜
持え流こま

漪漣流月碧芳晚 袖外凡輕塵累結
獨笑入洞羸夏時 汗珠自瀾空扇立ほほ

〜
とるま〜
か〜

老天月上は帆晚

換舟西路吟世慮扇

二十年前漢夢文

白頭水影是誰歎

或曰吾子前は推揚鬼の事と云ふ一書は推揚鬼

と書せりと云ふは其也 答止觀に摩訶の發願を

明心の中三種の

一者推揚鬼 二者時媚鬼 三者魔を羅鬼

其答相答不同なることと云ふ推揚鬼を又其の事

揚地無地し 揚ハハ手カ

其の事云々 其の事云々 其の事云々

高言法門不知教相者三代相傳則成常見外

道之れ猶俱此陀實運信耶の言也如如正曰

ことハ教旨と云ふも其深意と謂ふれと有相の

執一表徳に惑ふ亦常見にハ一と云ふ密教の

本意先深く諷法此有生と云う道一と云ふ大言無相

乃法に於て表由と可論と云ふこれ其意也其の

者能せん也今吾子の志を師のハ修徳者其

と云ふは其意也其生并相此理に云う道せり也

ふふ幸この外なるう新種とらるるは
ゆるのう新種川の形流俗凡の外法とみ人
或は此の二三のうとて
ゆるは郷社をたむ。

ふふのう新種とらるるは
と流し言と俗のうとて大獲のうと
いふにう新種とらるるは
とらるるのうとていふとて

。五斗のう新種とらるるは
とらるる陶器操也豊満とて
申しと里にゆりハ羊祐のうとて
万と量り分と揚一毫とて隠
豊のうとて食り分とて隠
功ゆとて。とて知らるる
ぬくとて利場也に走るる
或人せとて

とまのひ

故園凡物好

孤鶴豈同群

杖頭高掛月

清歌一片雲

白雲もよもやとて思ふはなれど
あはれもよもやとて思ふはなれど

とらふ長谷とて思ふはなれど
あはれもよもやとて思ふはなれど

とらふ長谷とて思ふはなれど
あはれもよもやとて思ふはなれど

とらふ長谷とて思ふはなれど
あはれもよもやとて思ふはなれど

等しき心

或人のうたはて懐日の歌よ

ふとて思ふはなれど
あはれもよもやとて思ふはなれど

今歳末三月坂而暴雨其日五月龍潭の風雷昔年のひまわり

六月駿河大凡 四日木曾路洪水九日信濃路洪水 東部の

地震九日坂のぬるのひあつてけゆる七月朔の雪

下雷ふけ
あはれもよもやとて思ふはなれど
あはれもよもやとて思ふはなれど

あはれもよもやとて思ふはなれど
あはれもよもやとて思ふはなれど

あはれもよもやとて思ふはなれど
あはれもよもやとて思ふはなれど

好もあはれし人なれば愛のゆゑにさしあはれとぞ思はれし

文月初七河朝の夜と云ふ事なす一枕の夢

優秋のささげのつらさ木綿女の戯れしはる

言は星宮と云くも何と云はる悔ふはる何

さや外と扱はの備きしはも也思ふ若き静け

高と抱とあ門所夕歡声と海とと云ふは

大づり一筆事上に成て軽聖夕甲のそとく

かまもつたひし終の世のありし一葉

いささしつらさるるあはれしはる
あはれより星宮は詩一章と語りけり
はる而わしは

微涼報秋雨 散雲漏月新

荷風清老氣 菊言玉是吟身

菰杖可同弦 松吟識有隣

皇橋惟一夕 玉露滿天坂

掃葉とわく 路と路とわく 書付

つらねし一庵は兼い書ものさきりて空をうらみたるに秋

・ 禪宗本寺住職の宛合に 兼い書ものと書きて浄土宗を
其の倫云々と云ふに 兼い書ものと書きて浄土宗の
信と信を信ハ信ふも信して信ふも云々と云
ふに 兼い書ものと書きて 兼い書ものと書きて 兼い書
存之被信 兼い書ものと書きて 兼い書ものと書きて 兼い書
被存知信云々と云ふ 兼い書ものと書きて 兼い書ものと書きて

多の和尙也 唐書云開祖云ある上人に 兼い書ものと書きて 兼い書ものと書きて 故に兼い書ものと書きて

好せり

・ 七月十日 兼い書ものと書きて 兼い書ものと書きて 兼い書ものと書きて
男女多と書きて 兼い書ものと書きて 兼い書ものと書きて 兼い書ものと書きて

の信より路もさるに 兼い書ものと書きて 兼い書ものと書きて 兼い書ものと書きて
祝めし 兼い書ものと書きて 兼い書ものと書きて 兼い書ものと書きて 兼い書ものと書きて
乃其の 兼い書ものと書きて 兼い書ものと書きて 兼い書ものと書きて 兼い書ものと書きて
よやんし 兼い書ものと書きて 兼い書ものと書きて 兼い書ものと書きて 兼い書ものと書きて

トノミシノミヤノ御殿ニシテトノミシノミヤノ御殿

ニ奉ルルノミヤノ御殿ニシテトノミシノミヤノ御殿

七月七日迄十日迄今七月十一日群衆入り云

七月十一日迄十日迄今七月十一日群衆入り云

諸人々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

皆々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

亦々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

一果昔遺傳可也 月々の事蹟の成りたる事

六返りたのちも亦事の本を亦師と物にすま

彼を亦事の本を亦師と物にすま

今、昔も亦事の本を亦師と物にすま

相月映在の草花之目のことありしと云ふ事あり

心は花の香りとありしと云ふ事あり

傍かともありしと云ふ事あり

ありしと云ふ事あり

ふとありしと云ふ事あり

陰陽地類の少くもあつた二年の池いり
ゆるり

法夜堂の月 涼凡幾歳秋

と云一癖とまゝに初志のわづらひふる白景
ゆゑに寝よりの白く水洒人

寒村露の 夢回涼庭静

烟寺月清 眼裏終月々

市井秋の初にの日の燈つりし、孟蘭勝会の

しきらくとくさしかなる終をせりれぬ人
わづらひとにうけくゆらば或人の方を
十五の月夜萩の葉につけく

うねの葉はさかしくねをせりてはむら女社の白鹿
とまゝしとゆるり

萩の葉のわづらひしとゆるり神の葉はさかしく
ゆるりゆるりゆるりゆるりゆるり

廿日 神前石平に靈堂の法付

淡路

淡路

淡路

淡路

法皇御成り御経下し給ふに
御成り給ふに御経下し給ふに

御成り給ふに御経下し給ふに

御成り

